

図書だより

〈才4号〉
昭和56年9月1日
呉工業高等専門学校
図書委員会



まえがき

図書委員長代理 久保田 勲

「図書だより」第4号を発行します。

学生諸君も、従来のような手書きでは読む意欲が湧かないだろうと思われるので、本号から活版印刷とし、全学生に配布することにしましたので、是非熟読して読書生活に役立ててください。

今後も3回/年位の計画で発行したいと思っています。内容としては、学生諸君の読書感想文を主体に編集したいと思うので、振っての投稿を待っております。

学生諸君のための図書館だから、われわれ図書委員会としても、諸君とがっちりスクラムを組んで、「図書だより」の内容をより充実したものにして行きたいと念じています。

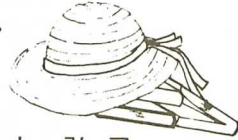
読書は学生時代の特権と考えて、大いに本を読んでほしい。社会へ出て実務につくと、仕事に追われて読書の時間を見出すことは極めて困難となります。せいぜい週刊誌を読む位が大多数の社会人の毎日でしょう。淋しいことだがこれは避けられないようです。したがって学生時代の特権を活用して、許される限りの時間を読書にあて教養を高めてほしい。特に高専生は一般教養が不足しがちだから、進んで教養書を読み、人間としても豊かな教養人としての技術者になって頂きたい。今回のアンケート調査では、1日の平均読書時間30分以下という学生が、全体の66%もあり、呉高専生が如何に本を読まないかにびっくりしています。これでは何としてもうら淋しい。

5年生を対象として、今年も就職用図書を相当数購入してありますから、活用して就職に万全を期してください。

この際御願いたいことを一つ、それは図書を無断で持ち出すことの絶対ないように。これは教養人としてのマナーの問題ですが、わが呉高専の学生はマナーに欠けることのない青年紳士であってほしいと思います。

次回「図書だより」原稿のメ切は10月31日です。どしどし投稿して下さい。

親指のうずき



2A 高木 弘子

アガサ・クリスティーを御存知でしょうか。私はまだこの一冊しか読んでいないのですが、いつか他の小説、例えば『そして誰もいなくなった』『予告殺人』『ゼロ時間へ』など、読みたいと思っています。クリスティーはそれ以外も書かれておられるが、推理小説が特に有名なようです。そして、名探偵ポアロやミス・マーブルやトミーとタバンスも。1979年には『ナイル殺人事件』という映画が放映されました。見られた人もおられると思います。

さて、『親指のうずき』はもちろん推理小説です。初老のトミーとタバンスが、少し気になる事に首を突っ込んで次第に事件に関わっていくものです。

サニー・リッジという養老院に伯母を訪ねた二人、そこでタバンスはランカスター夫人に会いました。老婦人の幻想とも思われる「暖炉の奥に子供がいる」という言葉、伯母が亡くなる前にランカスター夫人にいただいた絵に描かれた見覚えある家、ランカスター夫人の失踪。タバンスはランカスター夫人の身に何か起こっているのではないかと、探索にのりだしたのですが、絵に描かれた家をようやく見つけ、近くの町で話を聞き、教会の墓地を調べ、挙句の果てには、何者かに頭を殴られて入院してしまいました。しかし、そうまでして探しかつたランカスター夫人は…。

結局、不幸な事実が浮き彫りにされただけでした。誰一人として幸せになる人はいませんでした。しかも犯人は、犯罪を悪いこととっていなかったのです。それにしても、罪を犯した妻のため、事件を知りながら秘書と隠し続け、妻を護ろうとしていた夫を、果たして一概に非難できるでしょうか。

しかし、タバンスには驚きました。危険なのを承知で、あちこちへ調べに行ったのですから。ランカスター夫人のためということもあるでしょうが、冒険を楽しむという度胸の良さ、さすがに殺されそうになった時には鮮烈な恐怖に襲われていましたが、その行動の後得られたものが何か、あるかどうかさえ、疑問に思います。心境がわからないことはないんですが、私だったら、いくら調べても入院した後は止めてしまうでしょう。

この小説、おもしろく読みました。それとタバンス

が話を聞いて回って次々に事実が出てきて、推理というより、事実をつなげた結果、事件がはっきり判る、そんなパターンにも、トミーとタバンスに好感を持ちました。

ノストラダムスの
大予言 Ⅲ

5C 角舎 圭司

「当世の学生は昔の学生に比べて本を読まない」と、言われて久しいが、私も多分に当世の学生気質を踏襲しているのか、漫画やスポーツ新聞なら喜んで読むが、長編小説やその他諸々の単行本となると読むどころか“さわる気にもならない”。これ以上書いていくと無駄な活字を増やすことになるので前書きはこれぐらいにして、本文に移ることにしよう。

前に述べたように私は大の本嫌いであるが、「これは、おもしろい」と、読んでしまったのが、『ノストラダムスの大予言Ⅲ』である。

今、私はこの本の表紙をじつとながめながら、7年前の『ノストラダムスの大予言Ⅰ』との出会いを回想している。当時中一であった私は、骨折をして自宅療養中であった。毎日退屈している私に悪友たちは「読んでみろよ」と『ノストラダムスの大予言』をプレゼントしてくれたのである。本嫌いの私も、他にすることがないので朝から黙々と読み夕方には読み終えてしまった。そして感じたのは「これはどえらい本だ、本当に人類は滅亡してしまうのだろうか、ほたら私は37才でこの世を去らんといけんことになる…」と、言うことだった。

あれから7年、その間に『ノストラダムスの大予言Ⅱ』が出たが、私は、映画でも『〇〇パート2』はバツしないから、これもおもしろくないだろうと思って読まなかった。しかし、作者はしつこく『パート3』を出した。私もそれに屈してとうとう『ノストラダムスの大予言Ⅲ』を買ってしまったという訳である。

知っている人はたくさんいると思うが、『ノストラダムスの大予言』とは、十六世紀フランスの大予言者（＝本業は医師・フランス王の最高顧問）ノストラダムスが綴った『諸世紀』という詩集の中の意味深長な詩を著者（＝五島勉）が解説していくといった趣向の本なのである。しかも、その解説が事実と照らし合わせて行なわれているのである。

例えば、『世界が減じる前に血の汗が流れる』とい

うが、これは単なる伝説として考えられてきた、が、昨年、米の飛行機の中で起こっている。それも原因不明で、血汗症としか呼ぶことができなかったそうである。この他にも、ハレー彗星や惑星直列のときには、周期的に地球に異変が起こってきたという。さし当たっては来年が惑星直列の年であり、5年後の1986年はハレー彗星のめぐってくる年である。『予言』によると、人類はこのころをピークに、あとは滅亡に向かっていくというのであるが……。

このように、この本の中身は、私たち人間にとっては、悲しむべき、恐れるべきものである。しかし、今までの予言的中率からしても、これから予言が当たり続けることが容易に判断できる。私自身、おそらく人類は近いうちに滅びるであろうと思っている。「こんな本に洗脳されるな」と、人は言うかもしれないが、現在の社会情勢を見れば（子が親をバットで殺し、どこかで戦争が起こり、また起こりつつあり、環境汚染の顕著になった地球）そう思わざるを得ない。

だから、私はこの本を“人類に対する警告”として受け取り、少しでも人類の滅亡の時期を遅らせて欲しいものだと思っているので、本が好きな人も嫌いな人も、信心深い人も深くない人も一読することをお勧めする。

最後に、本当に読む気になった人へ、やはりパートIから順番に読んでいった方がわかりやすいようなので、資金面に余裕のある人はそうすべきでありましょう。

車輪の下を読んで

4M 木下 智之

主人公ハンスを取巻く環境は、現在の青少年のそれとよく似ていると思う。

ハンスは、受験勉強時代から、子供らしい喜びを封じられ、ひたすら知識の詰めこみを強制された。そして彼は、父親や教師たちの名誉心によって操られる人形となってしまった。現在では、それもめずらしい出来事とは言えなくなったように思える。それが、校内暴力として表面化した例が、いくつもある。「勉強せよ」と先生が言う。勉強しないのは、己れの意志の弱さだとも思うけれど、子供の微妙な心理を理解することも大切だと思う。この小説のように押しつけ教育の結果、一人の有望な若者の未来をつぶしてしまうようなこと

が現在において起っているかもしれない。

もちろん、この小説のハンスの場合も、現在においても、先生たちは非常に教育熱心であるのだろう。しかし、子供のころ強制されれば誰でもがそうであるように拒みたい時期がくる。そんな時期であっても、先生たちは残酷にムチを振るとしたら…。それによって子供の純真な心がゆがめられてしまうのはおとなの責任である。

なぜこの小説の題が「車輪の下」なのであろうか、現代風に考えてみる。よい高校、よい大学、よい会社へ進むためには、あらゆるものを犠牲にして勉強せねばならないという考えが、多くの人の意識下にある。そんな人たちによって構成される社会という大きな車輪が、容赦なく子供たちを押しつぶしている。そこから来たタイトルであろうと思う。

この小説は、現代人への警告という一面も持っていると感じた。

私の好きな作家

3年生 M



僕は原稿が遅い。遅いと言って遅いところではない。何しろ期限を遅れるのだから。井上ひさし氏の小説を読んだことがおありだろうか。彼の小説「ブラウン監獄の四季」には彼の原稿遅れの言い訳の方法が何十ページに亘って書かれている。その方法もやはりプロフェッショナルとなると素晴らしい。ここで書きならべても枚挙に暇がないのでやめておく。是非御一読戴きたい。日常生活に於ける嘘のつき方の良き参考書となること請け合いだ。

僕は井上ひさし氏をべた褒めする。彼の小説ぐらいしか読んだことがないし、読むにつけ自分との共通性を見出すからだ。なまけ者で、別に習慣性もなく、それでいて社会批判を忘れぬ彼の小説には共感するところが多い。同じ井上姓でも靖氏の方は西域小説を二編読んだことがあるに過ぎない。あの夥しい漢字の羅列を見ると読もうとする気が半減してしまう。とは言え、一箇月に一冊読めば良い方で、本の虫などとはほど遠い。如何にも読んだ振りをする言わば似非本の虫だ。

どちらにしても井上ひさし氏の小説は読んで楽しいし、面白い。愉快だ。ここに御推奨致す次第だ。

飯干晃一〈角川文庫〉の 『仁義なき戦い』

4C 匿名希望

昭和38年4月17日深夜、山村組組員が打越会会員を急襲、一人を射殺した。

この一発の銃声が、敵対する両組による「広島ヤクザ戦争」の引金となった。しかも背後には、力による日本制覇を狙う神戸の山口組・本多会の二大勢力がひかえていたのだ。

殺られたら殺りかえせ—ヤクザ同士の血で血をあらうすさまじい抗争は、その一応の終結をむかえるまでに、組員のほか、巻きぞえにされた一般市民を含め、なんと40名をうわまわる生命が奪われていた。

山村組対打越会の「広島ヤクザ戦争」は昭和38年4月から昭和39年末までの1年9カ月にわたった。この間、広島と呉市内およびその周辺で、白刃がきらめき、拳銃とカービン銃が発射され、ダイナマイトが炸裂して、たくさんの血が流れた。

この『仁義なき戦い』は、その渦中にあった美能組元組長・美能幸三の手記をもとに構成した、迫真のドキュメントである。

上記のおおまかなあらすじでわかるように、舞台は広島であり、呉である。文中に出てくる町名など知っているものばかりなので、これほど場面がわかりやすいものはそうないだろう。

自分はヤクザもののドキュメントが大好きで様々のものを読んだ。読みながら血が騒いでくるのだ。だから、本を読むのが嫌いな自分でも、気づくと1日中ずっと読んでることが多い。そんなヤクザのドキュメントの中で特に自分に身近かで、カーッと燃えてくるようなものがこの『仁義なき戦い』です。

ヤクザ社会は仁義と俠気が支えになっているとヤクザは誇らしげにいうが、この本のなかには、そんな偽善は小指の先ほどもない。ヤクザ社会とはただ利害得失によってのみ動く集団だということが書いてある。ヤクザの喧嘩の原因は縄張りの争奪戦だ。法の裏側、地下の王国ではお互いに領土を奪おうと虎視眈々としているヤクザは、まるで戦国時代の大名である。

この本を読み終えて、ヤクザの社会とその戦いが、いかに虚しく、くだらぬものであるかということも思った。

最後に、話は変わるが、自分はこれを書くにあたって、参考のためにと初めて「図書だより」を開いた。

それを書いてあるものを読んで自分はガックリきた。皆ないたい本を読んでいるんだと思った。自分の感覚がおかしいのかもしれないが、「図書だより」とは、もっと気がるなことが書いてあるのかと思ってただけに、読む気にならなかった。こんなないたい「図書だより」など、限られた者しか読まないだろう。

それからの武蔵 感想及び考察

3年電気 K

- 1、 万づ依怙^{よこ}の心なし。
- 2、 身に楽をたくまず。
- 3、 一生の間慾心なし。
- 4、 我れ事において後悔せず。
- 5、 善悪につき他をねたまず。
- 6、 何の道にも別れを悲しまず。
- 7、 自他共に恨みかこつ心なし。
- 8、 恋慕の思なし。
- 9、 物事に数奇好みなし。
- 10、 居宅に望なし。
- 11、 身一つに美食を好まず。
- 12、 我が身にとりて物を忌むことなし。
- 13、 兵具は格別、余の道具をたしなまず。
- 14、 道に当って死をいとわず。
- 15、 老後財宝所領に心なし。
- 16、 神仏を尊み神仏をたのまず。
- 17、 心常に兵法の道をはなれず。

これは、剣聖宮本武蔵が、生涯守り通した「独行道」の全文である。俺はこの自戒の条文に驚嘆してしまった。この十八箇条の条文は、とても人間が守れるものではないからだ。独行道は人間のあらゆる欲望を戒め、又一般人からは非難さえ受けるような戒律を設けている。これはまさに社会への反逆ともいえるものだ。

では、武蔵にはなぜこのような自戒が必要だったのか。それは彼が、剣を持った哲学者だったからだ。彼は真理を探究する万人に一人の道を歩もうとした。古代ギリシャの哲学者や、釈尊がそうしたようにである。これら古人は、高度な論理的考察や、精神修行によって真理を探究した。武蔵とて同様である。しかし、彼は剣を持っていた。およそ真理とはかけ離れたように見える剣が、彼の真理探究の道となつたのだ。それはまさに不動明王の持つ降魔の剣となり得たのだ。

そして彼は五輪書に真理を記して死んだ。彼こそ日

本の一大哲学者だと俺は思う。

本の利用

4M 山本 和宏

私達の回りには非常にたくさんの本がある。私達がしばしば使う専門書類、その他辞書、小説、歴史書、又週刊誌など全く膨大な量である。これらすべての利用について考えるわけにはいかない。ここで私は小説類についてのみ述べることにする。

そもそも文学作品、その他小説類をうまく利用するとはどういうことだろうか。

専門書、辞書の利用というその使用法は限られて、私達でもたびたび利用している。

しかし、文学小説や推理小説などになると事態は全く変わってくる。ここで一つ例を上げてみよう。

一、二年の国語では、読書感想文というものを書かされる。私は森鷗外の雁について感想文を書いた経験がある。

感想文を書く時点で、ふと内容について考える。多少はましなものをかきたいから、この本はこういう物で、作者はあれが言いたい、これが言いたいなど考える。そうして考えるうち、5分10分でなく1時間以上ぐらいたつと、何となく本の全貌が見えてくる。深い意味もほんの少しだけ見えるような気がする。

問題はこの時である。この、しばらく考えている間に、私達はものの見方を養っているのである。それは直接生活に影響するものでなく、1冊2冊ぐらいい読んだからといって実用的になるものではないが確かに身につくので、100冊、200冊もって読めば、それはまちがいなく私達に一つのもの考え方というものを与えてくれると私は思う。

もちろんそれだけではなくて、本の表現技巧や内容を楽しむのも、本を利用する目的の一つだろう。私達はむしろこちらを目的として本を読む。しかしどういう目的で読むにせよ、前言ったことは必ずといっていいほどあると思う。

その他の例を上げてみる。例えば推理小説、このたぐいの本はもっぱら本の内容に引かれて読むものであろう。これらではどうやって考えりゃいいんだと思われるだろう。確かに中を読んだだけでは、何にしても得るのはむずかしい。

しかし解説を読むと、全くわからないものでなく、そこにははっきりと作者の考えが顕著に現れている。

そしてきっとその本について考えさせられるに違いない。

解説を読むという手はどの本にも有効だ。私の個人的な意見だが、これは推理小説、しかも最近の社会的推理小説とでもいうかこういうものにより有効だと思う。

要は、本を読むことである。暇さえあれば…というのではなく、何もすることがない時ぐらいいのであれ。それがどんな本であれ。

私は、最近また本を読み始めた。もっぱら推理小説ではあるが、でもそのせいかなんと本を読むのが楽しくなった。今は、小栗虫太郎の黒死館殺人事件を読んでいる。

以上は私の独断と偏見である。他の人はまた違った考えをもっているかもしれない。本なんぞ時間が惜しいわいという人もいるだろうが、本は読みはじめたらおもしろいものである。大いに本を読んで、利用、活用してほしいと私は思う。

読書について

4C K · T

ぼくが、本を選ぶ場合には、まずその本のタイトルから受ける感じで決める場合が多い。そして、多くの場合は、奇抜なタイトルの本を読むことになる。

しかし、やはりタイトルだけで内容を判断するのはむずかしく、時には、自分が始めに受けたイメージと内容が全然ちがっていて、がっかりさせられることがある。そこで、最近ではまずその本の書き出しの部分を2・3行読んでみて、その内容を判断することにした。又は、表紙がついているものでは、その裏にあらすじが書いているので、それを見る。

でも、この場合は、どうしても文庫本を読んでもうようになってしまう。なぜなら、全集とかいう重々しい本だと、書き出しの部分を読む前にそのいげんに圧倒されてしまって、とても読もうなどという大それた気は起こらないのである。

そういうわけで、ぼくは奇抜なタイトルの文庫本ばかり読んでしまうのであるが、うちの学校の図書館には、あまりぼくの好みの本がなかった。だから、最近では、図書館から、めつきり足がとおのいていたのが、この前ふと、昼寝をしにいてみると、新しい文庫本が何冊か入っていた。やはり図書館であるから大作と

か名作とかいわれるものが多かったが、中には、数冊最近っぽいおもしろそうだな、読んでみようかなという本があった。

そこで、早速読んで見たのだが、なかなかおもしろかったと思う。

その中でも、野坂昭如の「アメリカひじき」の中の「ねずみ」と開高健の「パニック裸の王様」の「裸の王様」というのは、かなりおもしろかったという訳で、ぼくは最近ちょくちょく図書館へ行っている。そして、もっとおもしろい読みやすい本が入ってくるのを期待して、日夜、図書館で昼寝しながらまっているのである。

野坂昭如の「アメリカひじき」について少し書いてみるとぼくが、ふとめざめると、目の前にほんやりと一冊の本があらわれた。なぜ目の前にあったかという、ぼくは、昼はいつも図書館へ睡眠をむさぼりに行っているのである。

このぼくの目をひいた本というのは、「アメリカひじき」という本だった。なぜ目を引いたかという、表紙がきらびやかだったの一言につきるだろう。ぼくのすどい、インスピレーションが一瞬きらりとひかり、この本を読んでみようど決心した。インスピレーションから決心までおよそ5秒という訳で、この本を借りて帰ったのだが、なかなか読もうという気がおこらないまま数日が過ぎた。

そして、とつてもとつても、ひまで体にかびがはえそうな土曜日やっとその一ページ目をめくるにいたったのであるが、これがなかなかよかった。

いや、この本は、戦後の焼跡、闇市派の作品なので、よかったというよりむしろすぐく心をひかれたといった方がよいかもしれない。とにかく本を開いて数時間、ジュースも飲まず休けいもせず、一気にこの本を読んできました。

本の内容は先にも書いたように、戦後焼跡、闇市派のものであり、戦争につきものの、戦場でのすさまじい戦いの記録ではなく、戦争の影にある一般の人々の生活がおいつめられていく過程や両親を亡くした孤児の死までとかいうようなものだった。読むにつれてやりばのない怒りや悲しみがふくれあがっていった。そして、読み終わった後が、なんだかとても心に残る一冊だったような気がした。



読書雑感

一般科目 川尻 武信

「どんな本を読んだらいいでしょうか」と尋ねられたときほど困ることはない。出版されている本は無数にある。これらの中から適切な本を選び出すことは容易ではない。無難な答えは、「古典的な名作や現代の名作を読んだら」ということになる。

いくら名作であっても、その作品の価値は個々の読者とのかわりあいによって決定される運命にある。読み手に作品に対する興味・関心が低くかったり、読書経験や人生経験が豊富でない場合、読み手は、作品の真価をとらえられない。名作もくだらない本となりうる。

しかし、名作がくだらないとはじめ思ってもいつか素晴らしいものである日が来る。名作には、時の流行や時の経過に左右されない真実がある。時間を越えた普遍的なものがある。特に、古典的名作には、永い年月に堪えてきた歴史的な重みがある。

古典的名作などを読むのがどうも気が進まないときは、興味、関心のあることに関係した本をどんどん読めばよい。英語を話すことに興味のある人は、その道の達人による書をいろいろ読んでみればよい。一例をあげると、「英語の話しかた」（サイマル出版）がある。同時通訳者の一人である国弘正雄氏によるものである。3部から成り立っていて、世界の中で英語の占める位置、日本の英語教育に対する提言、話す英語のための学習法が述べられている。話す英語について、その基本は、中学校3年までのやさしい英文を反復音読すること（筆者はこのことを只管朗読^{しかん}ということばで表わしている）は大変興味深い。

本の紹介で話が横道にそれた。興味、関心のあることに関した本を沢山読むことは、本の内容を受身的に解釈する読みにおわらずに本と主体的な関係をもつ読みに達する絶好の機会である。

私の読書歴

一般科目 左古 悦雄

知識の吸収を本に頼るのは情けない。自分の行動・

経験をとおしてのみ、それを知識としていきたい。そう思っていた時期があった。一面では、まことに思い上がりであった。生き方の本などなら、それも良からう。それではとおらない分野もある。たとえば学問である。まず書物あるいは講義で知識・過去の財産を吸収し、それを己れのものとし、その上で自らの新しい考えを付け加えていく。こうでなければ進歩はない。はるかかなたの昔の段階をウロウロしているだけのことである。自分一人の世界にとじこもってシコシコ生きていくなら別であるが、人の前に出て生きていく人間には、そぐわない。

学問の分野でなく一般の書物に関して自分なりにそろそろ本を読んでみたいと思い直し始めたのは、読まなくなって3・4年後の18、19才の頃であろうか。中学校時代、文芸部に身をおき少しは文学小説を読んだ事もあったが、この時期ではもう固いものは受けつけなかった。主に推理小説等を文庫本で読んだ。どんどん読んだ。自分にはなかった新しい表現、言葉使いのあることを知った。何か新しい世界に入り込んだ気さえた。

しかし、読まなかった時期を悔いてはいない。むしろ誇りに思っている。人間の発達段階に応じた時期に、それに応じた内容のものを読み、自分の成長に役立てることができれば、それが本の最も有効な利用法ではあるまいか。まず本を読み、それを自分なりのものとし、自分の人生に生かしていく。そのものが使えなくなればまた新しいものを読み、またそれを生かしていく。このことを繰り返していく。それが学問、一般を問わず普遍的な本の生かし方ではないだろうか。本を読んだがそれを実際に生かすことをしないのでは、本が泣くというものである。

何はともあれ、行動・実践の前の読書にまず取り組もう。



マイ・コンピューターをつかう

〈講談社〉 安田寿明著

機械工学科 藤田 幸史

電子計算機との最初の出会いは、大学時代に初めてフォートランを習い、簡単な演習問題をやった時である。そのときは、お粗末なエラーばかりで、計算機は

何も言わずどこが悪いかさっぱり分からないで、計算機に一方的にしか意志を伝えられないことにもどかしさを覚えたものである。そのようなことから計算機と一対一でもっとうまく意志の疎通ができるはずだと思っていた。そんな折、テレビのNHKコンピュータ講座で、会話型のベーシックを使って、計算機を自由自在に駆使しているのを見て、これだと思った。しかし、そのような計算機は、とてもまだ我々にとり手に届く代物ではなかった。ところが、マイクロコンピュータが1970年代の後半に出現して、今や電子計算機は我々の手近な存在になった。現在、多くの安価なマイクロコンピュータが発売されており科学技術計算をするには、ベーシックを使えば十分に間に合う。しかし、それ以外の目的、例えば計測・制御に応用するととなるとどうしても内部の働きについての理解が必要となる。すなわち、I/O機器を接続したりメモリを拡張したりするのにどのようにすればよいかを知らねばならない。

この本は、そのための方法をI/Oもメモリもファイルとして統一的にとらえ解説を試みている。まず、メモリ接続において、よくつまづきがちなアドレスコードについてどのようなICを使えばよいか、どのようにメモリを接続すればよいか、具体的な回路によりよく解説されている。またメモリやI/Oを拡張するために必要なバッファ回路についても詳しく述べられている。I/OについてはI/Oポートの基本的な回路の作り方を述べた後、入力機器として紙テープリーダを接続し、プログラムにより処理する方法が詳しく説明されている。さらに基本的な入出力機器として、テレタイプライタについて、インタフェースの方法が述べられ、オーディオ・カセットテープによるプログラムやデータの格納の方法も、基本的に同じ処理でよいことが説明されている。その他のI/Oとして、テレタイプライタやデジタルカセット、ミニフロッピイディスク、A/D変換器について説明されている。また、マイクロコンピュータを用いて、プログラムにより電卓と同じような計算をさせるためにはソフト開発が大変であることが述べられ、簡便な方法として電卓ICを使う方法をあげている。最後に、ベーシックについて簡単な説明がなされている。この本の付録に著者の開発した68系のタイニーベーシックのリストがのっているので、ベーシックを自作する者にとっては便利であろう。付録には、この他各種CPUによる基本的な回路図がのせられ参考になる。

全体としてこの本、豊富な内容がぎっしりつまっているという感がある。



× × × × × × × × × × × × × × × ×

最近の読書関係のニュースを新聞から一つ二つ拾ってみました。

ゝながら族、は1割

小4女子 7.3冊、高3男女1冊
1カ月の読書量

毎日新聞社は、全国学校図書館協議会の協力で毎年「学校読書調査」を行っている。昨年は従来の「読書量」「最近読んだ本」などのほか「現代作品の読まれ方」「本を読みながらのゝながら、行動」についても調べた。そのいくつかを紹介しよう。

ゝながら族、は小学生11%、中学生12%、高校生10%。本を読みながらしていることの内容は、小学生は①テレビを見る②食事をする③ラジオ、レコード、テープなどを聴く④勉強する、の順で、中・高校生は①ラジオ②テレビ③食事④仕事をする、と同じ順だった。この場合、雑誌を含まない。雑誌を読む時のゝながら族、は小学生37%、中学生48%、高校生53%と、かなり上回る。

現代作品の読まれ方については、古典の類ではないが、ある程度評価の定まった現代作品20点ずつを選んで、どう読まれているか調査した。読んだ本、よかった本の両面から質問したが、「よかった本」のベスト5は次の通り。

- 【高校生】▷男子①「人間の証明」②野生のエルザ」③「どくとるマンボウ航海記」④「白昼の死角」⑤「青春の門」▷女子①「あゝ野麦峠」②「野生のエルザ」③「人間の証明」④「ガラスのうさぎ」⑤「どくとるマンボウ航海記」

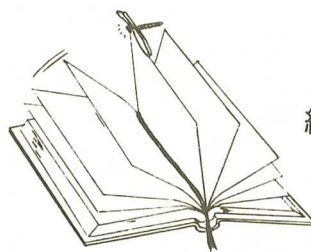
最近、本を読まない子が増えてきたといわれるがどうだろうか。一カ月の読書冊数を調べたところ、小4女子の7.3冊が最高、高3男子の1.0冊が最低。男子に比べ女子の方が冊数を多く読み、学年の低い方が読んだ冊数が多いという傾向は、例年と変わらない。小学生(4~6年)全体の平均は5.6冊であるのに対し中学生1.9冊、高校生1.2冊。

一カ月に一冊も読まなかった者は、わずかずつだが減ってきている。しかし中学生男子で半数、高校男子で60%近く、女子でも40%が、一カ月に一冊も読んでいないというのは、読書教育に関心を寄せる人を驚かせた。

7月下旬時のある週の ベストセラー

(中区本通・広文館調べ)

①窓ぎわのトットちゃん、黒柳徹子、講談社②十万分の一の偶然、松本清張、文芸春秋③海軍めしたき総決算、高橋孟、新潮社④ひとびとの聲音(上、下)、司馬遼太郎、中央公論社⑤体の疲れをとる本、五味雅吉、青春出版社⑥明日はわが身、笹沢左保、いんなあとりっぷ⑦驚異の時間活用法、糸川英夫、PHP⑧心がかぜをひいたら、武田鉄矢、集英社⑨1999年カルマと霊障からの脱出、桐山靖雄、平河出版⑩なんて美しい女性だろう、千宗室、主婦と生活



編集後記

念願の図書関係予算が増額され、図書だよりも4号以降は、活版印刷で学生全員に配布できるようになった。第4号は、その記念すべき号なので内容もそれに相応したものをと、教官各位、学生諸君に格別の協力をお願いし、十一編もの原稿を戴いた。バラエティに富んだ学生諸君の原稿で面白い、親しみやすい号になったと喜んでいいる。アンケート調査では、図書だよりはあまり読まれていないようであるが、印刷も配布方法も違う今号以後は期待している。(兼本)